

[05_02]九州大学大型計算機センター広報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1467999>

出版情報：九州大学大型計算機センター広報. 5 (2), 1972-04-27. 九州大学大型計算機センター
バージョン：
権利関係：

随 想

福岡女子大学連絡所 国宗 真

国立大学の連絡所めぐりが大体済んだので、そろそろ公立大学の番になるから「随想」を書いてみませんか、広報担当者から云われたのが昨年の夏頃であった。会議などで議論をたたかわせたり、職員組合で要求書を書いたりするのはどちらかと云えば好きな方であるが、随想を書いたり、会合で挨拶をしたりするのは苦手中の苦手で、ことごとくと云ってよい程断わってきた。親戚や卒業生の結婚式でも、挨拶をしなくてもよいことを条件にして出席していた。広報の随想も断わりつづける自信があったのであるが、広報教育委員長の広田先生の巧妙な作戦にひっかかって、いさぎよく引き受けざるを得ないこととなった。

現在マンモス大学と称される大学が多数ある中で、当女子大は教員の数が助手を含めて50名ならず、学生数は600名という極めて小規模な大学で、その小ささで稀少価値を誇っている。ここ数年卒業後プログラマーとして就職する人が増えているが、女性にとっても働きがいのある職業となっている。私達の大学には学生定員17名の家庭理学科があるが、ここで「計算機数学および演習」という学科目が設けられている。将来はこの方向を強化して行きたい。ほとんどの国立大学ではすでに持っている中型の電子計算機をなるべく早く持ちたいと願っている。

当連絡所は私が連絡所長で、私の研究室の助手がその事務局長、ただし現在のところ他に連絡すべき人はいない。1、2年内にはもう少し所帯が大きくなることを期待している。

計算機利用に関する大きなとりえは、当女子大が福岡市内にあって、センターと非常に近い事である。少し計算をつめてやるときは、センターに毎日でかけることもできるし、ときには1日2回往復ということもある。連絡所と云えばセンターの出先みたいなものであるが、私の方ではセンターのことを福岡女子大学大型計算機センター箱崎出張所と潜称している。全国共同利用施設というものは私達小さな大学に属するものも、自分の物のような顔をして威張って利用できるものであるから、本当に有難いことである。

昨年12月には、TSS端局設置をセンターから認められ、新年度には購入のための予算も県が認めてくれた。120万程の機械であるが、県が年度当初からこのような特定の機械購入のために予算を認めたことは極めて珍しいことである。おかげで箱崎出張所までわざわざでかけなくても、かなりのことができることになるので、今から楽しみにしている。

この2年程センターで相談員をやっている。相談員という仕事は週2時間拘束されることになるが私にとって莫大な効用を持っている。そして有難いことはセンターは私のように貧弱な知識を持っている者でも結構相談員として認めてくれる。小さな大学の教員は講義などの持ち時間も過大であるし、雑用も多い。ともすれば仕事は中断しがちである。週2時間センターにでてくることは私にとって仕事のはげみとなっている。不精な私はマニュアルを正確に読んで仕事にかかるようなことができない。何度も失敗を重ねては少しずつ利口になる方法を取っている。しかし自分だけの失敗はいくらやってもその試みの範囲は極めて限られている。相談員をしていれば、他の多くの人の失敗を見て

利口になることができる。また相談に来られても私にわからないような内容のもの、場合によってはかなり高度な内容のものも含まれている。私は責任上センターの人に相談して教えてもらうことになる。つまり私は公然と毎週センターの人から（それは受付の人、オペレーター、事務局の人、開発部の人などいろいろであるが）直接懇切丁寧にいろんなことを教えてもらうことができる。また相談員の中には色々のパートでのベテランが居て、その人達とも親しくなることができる。またそのベテランたちとくると例外なしに親切な人達であるのでいろんなことを習うことができる。計算機の利用に関してはセンターの専門家より、ユーザーの方がよく知っていることもかなりあるのである。またセンターの人を覚えたおかげで、計算機の利用あるいは運用に関しての苦情、改善の意見なども遠慮なく提出することができる。私はそのお礼として週2時間をユーザーに奉仕して、ユーザーとセンターの取り次ぎ役をしたいと思っている。

計算機センターは共同利用の施設であるから当然だと云ってしまえばそれまでのことであるが、およそ官公庁と呼ばれるもののなかで、センター程利用者の立場を考え、利用者の苦情、要望、意見を求め、それに副うように努力しているところはあまりないのではなからうか。要望などは文書によって始めて公的に取り上げやすくなるのであるが、ユーザーからの具体的な要望提出はあまりにも少なすぎるように思える。2月末西利協の総会があって出席したが、せっかくの連絡所のあつまりにしては、ユーザーからの苦情要望の取り次ぎが少なすぎたように思った。

毎年1月～3月は計算機の非常に混む時期で俗にmaster effect と呼ばれている。（大学院マスターコースの卒論メ切の影響が多いという意か！他の研究者、特に出張利用者はなるべくこの時期を避けて仕事をした方が賢明である。）この時期にはオペレーターも過労になり、ターンアラウンドタイムも大巾に長くなり、ユーザーも深刻になり、ロビーには一種の殺気を感じるようになる。出張利用者も増えてくる。3日の出張利用に何程の成果も得られないまま帰る人が増える。私は九大センターがまだなくて、東大まで出張したときのことを思い出し、出張利用者の優先利用をもっと徹底させねばと考えていた。この欄を利用してそのための議論を展開したいと思っていた。さいわい2月末の西利協総会で、そのような措置を取るようになったとの説明があったので私の議論の展開は不用となった。

またシステム障害により、何も実行しないで戻されたジョブに対しては優先的再計算が必要と考え主張していたのであるが、これも3月から実施されることになった。おかげでこの欄を利用してセンターに苦情を述べるたのしみがまた1つ減ってしまった。

しかし苦情のたのしみの大きなのが1つ残っている。TSSだ。しかし書き出せば長くなりすぎるのではしよることにする。私はTSSの初期からの利用者の1人であるが、センターのロビー端局をもっぱら利用している。ここの利用者の間では「寛容と忍耐」がモットーであるが、現在においてもこのモットーは極めて大切であり有効である。精神修養の場として推奨することができる。しかし一度このTSSに取りつかれた人達がそれにもかかわらず、何年もねばっているのはそこに大きなメリットがあるからである。（この内容についてはここではふれない。）いずれにしてもTSSサービス中の計算機の振る舞いは利用者にとって理解しがたい点多すぎるのである。TSS運用の直接の責任

者が、直接ロビー利用者とサービス時間中に対応して、計算機の動きを監視し、端局よりの入力と出力との関係を明確にさせるようにすれば、割りに短期間のうちに、色々な欠陥を指摘することができるのではないかと考える。TSSサービス時間は普通の勤務時間外が割りあてられているので、このようなことはセンター職員に取っては大変なことではあると思うが、ある期間このことは必要なのではないか。利用者の中にもそのため積極的に協力してくれる奇特な人はかならず居ると信ずる。その他TSSに関する要望事項を適当な機会に提出したいと考えている。

計算機のハードウェア、ソフトウェアのことについて、私は無知であるために、時にいろんな妄想が生まれたり消えたりする。そのひとつ。ターンアラウンドタイムが長くなると計算機はもっと能率よくなるものかと考える。マルチジョブ、マルチプロセッシングとかいうので小さなジョブであれば並行して2つ3つの計算処理がおこなわれるとか聞く。いまここにコア使用が64kwいっばいで30分かかるジョブがあるとす。この30分の間コアは64KW占有されたままであるのに、時間の流れに応じて計算機がコアの内容を出し入れしているのは各瞬間各瞬間ごく一部分にすぎないようである。これはまことにもったいないように思う。1つのジョブの中でもおたがい独立に行なえる計算部分はいくつも並行して走らせることはできないだろうか。一番簡単な例として1000個の数のたし算を考えよう。

これを例えば10に分割して並行して100個ずつの和を取り、さらにその累計を求めるようにすれば計算時間は数分の1にならないだろうか。いつか食堂で九大工学部の牛島先生に伺ったら、10年程前にはそれに関する論文がでていたことがあるとか。あまり時間もなかったし、私にはむつかしそうだったので、くわしく知ることはできなかった。

下手な随想は書き出すと長くなりすぎ、いずれにしろ編集者を困らせることに変わりなさそうである。その顔を思いうかべながら、筆をおくことにしよう。

1972.3.6